石全集
十五卷

明暗

下

全三十四卷　第十四回配本

昭和三十一年十二月十二日　第一刷發行　©　漱石全集　第十五卷
定價　一五〇圓

著者　夏目漱石
東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
發行者　岩波雄二郎
東京都青梅市根ケ布三八五番地
印刷者　山田一雄

發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二ノ三　株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

精興社印刷・永井製本

目次

明暗下　三
解説　二四一
注解　二五三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

明暗下

百六

「なに兄さんが強情なんですよ」とお秀が云ひ出した。嫂に對して何とか説明しなければならない位地に追ひ詰められた彼女は、斯う云ひながら腹の中で猶の事其嫂を憎んだ。彼女から見た其時のお延ほど、空々しい又づう〳〵しい女はなかつた。

「え、良人は強情よ」と答へたお延はすぐ夫の方を向いた。

「あなた本當に強情よ。秀子さんの仰しやる通りよ。其癖だけは是非お已めにならないと不可せんわ」

「一體何が強情なんだ」

「そりやあたしにも能く解らないけれども」

「何でもかでもお父さんから金を取らうとするからかい」

「さうね」

「取らうとも何とも云つてゐやしないぢやないか」

「さうね。そんな事仰しやる筈がないわね。又仰しやつた所で效目がなければ仕方がありませんからね」

「ぢや何處が強情なんだ」

「何處がつてお聽きになつても駄目よ。あたしにも能く解らないんですから。だけど、何處かにあるのよ、強情な所が」

「馬鹿」

馬鹿と云はれたお延は却つて心持ち好ささうに微笑した。お秀は堪まらなくなつた。

「兄さん、あなた何故あたしの持つて來たものを素直にお取りにならないんです」

「素直にも義剛にも、取るにも取らないにも、お前の

方で天から出さないんぢやないか」
「あなたの方でお取りになると仰しやらないから、出せないんです」
「此方から云へば、お前の方で出さないから取らないんだ」
「然し取るやうにして取つて下さらなければ、あたしの方だつて厭ですもの」
「ぢや何うすれば可いんだ」
「解つてるぢやありませんか」
三人は少時默つてゐた。
突然津田が云ひ出した。
「お延お前お秀に詫まつたら何うだ」
お延は呆れたやうに夫を見た。
「なんで」
「お前さへ詫まつたら、持つて來たものを出すといふ積なんだらう。お秀の料簡では」
「あたしが詫まるのは何でもないわ。貴方が詫まれと仰しやるなら、いくらでも詫まるわ。だけど――」
お延は此所で訴への眼をお秀に向けた。お秀は其後を遮つた。
「兄さん、あなた何を仰しやるんです。あたしが何時嫂さんに詫まつて貰ひたいと云ひました。そんな言掛りを捏造されては、あたしが嫂さんに對して面目なくなる丈ぢやありませんか」
沈默が又三人の上に落ちた。津田はわざと口を利かなかつた。お延には利く必要がなかつた。お秀は利く準備をした。
「兄さん、あたしは是でもあなた方に對して義務を盡してゐる積です。――」
お秀がやつと是丈云ひ掛けた時、津田は急に質問を入れた。
「一寸お待ち。義務かい、親切かい、お前の云はうと

する言葉の意味は」
「あたしには何方だつて同なじ事です」
「さうかい。そんなら仕方がない。それで」
「それでぢやありません。だからです。あたしがあなた方の陰へ廻つて、お父さんやお母さんを突ツ付いた結果、兄さんや嫂さんに不自由をさせるのだと思はれるのが、あたしには如何にも辛いんです。だからその額丈を何うかして上げようと云ふ好意から、今日わざ〳〵此所へ持つて來たと云ふんです。實は昨日嫂さんから電話が掛つた時、すぐ來ようと思つたんですけれども、朝のうちは宅に用があつたし、午からはその用で銀行へ行く必要が出來たものですから、つい來損なつちまつたんです。元々僅かな金額ですから、それについて兎や角云ふ氣は些ともありませんけれども、あたしの方の心遣ひは、丸で兄さんに通じてゐないんだから、それがたゞ殘念だと云ひたいんです」
お延は猶默つてゐる津田の顔を覗き込んだ。
「貴方何とか仰しやいよ」
「何て」
「何てつて、お禮をよ。秀子さんの親切に對してのお禮よ」
「高がこれしきの金を貰ふのに、そんなに恩に着せられちや厭だよ」
「恩に着せやしないつて今云つたぢやありませんか」
とお秀が少し癇走つた聲で辯解した。お延は元通りの穩やかな調子を崩さなかつた。
「だから强情を張らずに、お禮を仰しやいと云ふのに。もしお金を拜借するのがお厭なら、お金は頂かないで可いから、たゞお禮丈を仰しやいよ」
お秀は變な顏をした。津田は馬鹿を云ふなといふ態度を示した。

百七

三人は妙な羽目に陥つた。行掛り上一種の關係で因果づけられた彼等は次第に話を餘所へ持つて行く事が困難になつてきた。席を外す事は無論出來なくなつた。彼等は其所へ坐つたなり、何うでも斯うでも、此問題を解決しなければならなくなつた。

しかも傍から見た其問題は決して重要なものとは云へなかつた。遠くから冷靜に彼等の身分と境遇を眺める事の出來る地位に立つ誰の眼にも、小さく映らなければならない程度のものに過ぎなかつた。彼等は他から注意を受ける迄もなく能くそれを心得てゐた。けれども彼等は爭はなければならなかつた。彼等の背後に脊負つてゐる因緣は、他人に解らない過去から複雜な手を延ばして、自由に彼等を操つた。

仕舞に津田とお秀の間に下のやうな問答が起つた。

「始めから默つてゐれば、それ迄ですけれども、一旦云ひ出して置きながら、持つて來た物を渡さずに此儘歸るのも心持が惡う御座んすから、何うか取つて下さいよ。兄さん」

「置いて行きたければ置いといでよ」

「だから取るやうにして取つて下さいな」

「一體何うすればお前の氣に入るんだか、僕には解らないがね、だから其條件をもつと淡泊に云つちまつたら可いぢやないか」

「あたし條件なんてそんな六づかしいものを要求してやしません。たゞ兄さんが心持よく受取つて下されば、それで宜いんです。詰り兄妹らしくして下されば、それで宜いといふ丈です。それからお父さんに濟まなかつたと本氣に一口仰しやりさへすれば、何でもないんです」

「お父さんには、とつくの昔にもう濟まなかつたと

云つちまつたよ。お前も知つてるぢやないか。しかも一口や二口ぢやないやね」

「けれどもあたしの云ふのは、そんな形式的のお詫ぢやありません。心からの後悔です」

津田は高が是しきの事にと考へた。後悔などとは思ひも寄らなかつた。

「僕の詫様が空々しいとでも云ふのかね、なんぼ僕が金を欲しがるつたつて、是でも一人前の男だよ。さうぺこ〳〵頭を下げられるものか、考へても御覽な」

「だけれども、兄さんは實際お金が欲しいんでせう」

「欲しくないとは云はないさ」

「それでお父さんに謝罪つたんでせう」

「でなければ何も詫る必要はないぢやないか」

「だからお父さんが下さらなくなつたんですよ。兄さんは其所に氣が付かないんですか」

津田は口を閉ぢた。お秀はすぐ乘し掛つて行つた。

「兄さんがさういふ氣で居らつしやる以上、お父さんばかりぢやないわ、あたしだつて上げられないわ」

「ぢやお止しよ。何も無理に貰はうとは云はないんだから」

「所が無理にでも貰はうと仰しやるぢやありませんか」

「何時」

「先刻からさう云つて居らつしやるんです」

「言掛りを云ふな、馬鹿」

「言掛りぢやありません。先刻から腹の中でさう云ひ續けに云つてるぢやありませんか。兄さんこそ淡泊でないから、それが口へ出して云へないんです」

津田は一種嶮しい眼をしてお秀を見た。其中には憎惡が輝やいた。けれども良心に對して耻づかしいといふ光は何處にも宿らなかつた。さうして彼が口を利いた時には、お延でさへ其意外なのに驚ろかされた。彼

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

は彼に支配出來る最も冷靜な調子で、彼女の豫期とは丸で反對の事を云つた。

「お秀お前の云ふ通りだ。兄さんは今改めて自白する。兄さんにはお前の持つて來た金が絶對に入用だ。兄さんは又改めて公言する。お前は妹らしい情愛の深い女だ。兄さんはお前の親切を感謝する。だから何うぞ其金を此枕元へ置いて行つて呉れ」

お秀の手先が怒りで顫へた。兩方の頰に血が差した。其血は心の何處からか一度に顔の方へ向けて動いて來るやうに見えた。色が白いのでそれが一層鮮やかであつた。然し彼女の言葉遣ひ丈は大程變らなかつた。怒りの中に微笑さへ見せた彼女は、不意に兄を捨てて、輝やいた眼をお延の上に注いだ。

「嫂さん何うしませう。折角兄さんがあゝ仰しやるものですから、置いて行つて上げませうか」

「さうね、そりや秀子さんの御隨意で可ござんすわ」

「さう。でも兄さんは絶對に必要だと仰しやるのね」

「えゝ良人には絶對に必要かも知れませんわ。だけどあたしには必要でも何でもないのよ」

「ぢや兄さんと嫂さんとは丸で別ツこなのね」

「それでゐて、些とも別ツこぢやないのよ。是でも夫婦だから、何から何迄一所くたよ」

「だつて——」

お延は皆迄云はせなかつた。

「良人に絶對に必要なものは、あたしがちやんと拵へる丈なのよ」

彼女は斯う云ひながら、昨日岡本の叔父に貰つて來た小切手を帶の間から出した。

百八

彼女がわざとらしくそれをお秀に見せるやうに取扱ひながら、津田の手に渡した時、彼女には夫に對する

一種の注文があつた。前後の行掛りと自分の性格から割り出された其注文といふのは外でもなかつた。彼女は夫が自分としつくり呼吸を合はせて、それを受け取つて呉れゝば好いがと心の中で祈つたのである。會心の微笑を洩らしながら首肯づいて、それを鷹揚に枕元へ放り出すか、でなければ、ごく簡單な、然し細君に對して最も滿足したらしい禮をたゞ一口述べて、再びそれをお延の手に戻すか、何れにしても此小切手の出所に就いて、夫婦の間に夫婦らしい氣脉が通じてゐるといふ事實を、お秀に見せればそれで足りたのである。

不幸にして津田にはお延の所作も小切手もあまりに突然過ぎた。其上斯んな場合に遣る彼の戯曲的技巧が、細君とは少し趣を異にしてゐた。彼は不思議さうに小切手を眺めた。それから緩くり訊いた。

「こりや一體何うしたんだい」

此冷やかな調子と、等しく冷やかな反問とが、登場の第一歩に於て既にお延の意氣込を恨めしく摧いた。彼女の豫期は外れた。

「何うしもしないわ。たゞ要るから拵へた丈よ」

斯う云つた彼女は、腹の中でひや〳〵した。彼女は津田が眞面目腐つて其後を訊く事を非常に恐れた。それは夫婦の間に何等の氣脉が通じてゐない証據を、お秀の前に暴露するに過ぎなかつた。

「譯なんか病氣中に訊かなくつても可いのよ。何うせ後で解る事なんだから」

是丈云つた後でもまだ不安心でならなかつたお延は、津田がまだ何とも答へない先に、すぐ其次を付け加へてしまつた。

「よし解らなくつたつて構はないぢやないの。高が此位のお金なんですもの、拵へようと思へば、何處からでも出て來るわ」

津田は漸く手に持つた小切手を枕元へ投げ出した。

彼は金を欲しがる男であつた。然し金を珍重する男ではなかつた。使ふために金の必要を他人より餘計痛切に感ずる彼は、其金を輕蔑する點に於て、お延の言葉を心から肯定するやうな性質を有つてゐた。それで彼は默つてゐた。然しそれだから又お延に一口の禮も云はなかつた。

彼女は物足らなかつた。たとひ自分に何とも云はない迄も、お秀には溜飲の下るやうな事を一口でいゝから云つて呉れれば可いのにと、腹の中で思つた。

先刻から二人の様子を見てゐた其お秀は此時急に「兄さん」と呼んだ。さうして懐から綺麗な女持の紙入を出した。

「兄さん、あたし持つて來たものを此所へ置いて行きます」

彼女は紙入の中から白紙で包んだものを拔いて小切手の傍へ置いた。

「斯うして置けばそれで可いでせう」

津田に話し掛けたお秀は暗にお延の返事を待ち受けるらしかつた。お延はすぐ應じた。

「秀子さんそれぢや濟みませんから、何うぞそんな心配はしないで置いて下さい。此方で出來ないうちは、兎も角もですけれども、もう間に合つたんですから」

「だけどそれぢやあたしの方が又心持が惡いのよ。斯うして折角包んで迄持つて來たんですから、何うかそんな事を云はずに受取つて置いて下さいよ」

二人は讓り合つた。同じやうな問答を繰り返し始めた。津田は又辛防強く何時迄もそれを聽いてゐた。仕舞に二人はとう〳〵兄に向はなければならなくなつた。

「兄さん取つといて下さい」

「貴方頂いてもよくつて」

津田はにや〳〵と笑つた。

「お秀妙だね。先刻はあんなに强硬だつたのに、今

度は又馬鹿に安つぽく貰はせようとするんだね。一體何方が本當なんだい」

お秀は屹となつた。

「何方も本當です」

此答は津田に突然であつた。さうして其強い調子が、何處迄も冷笑的に構へようとする彼の機鋒を挫いた。お延には猶更であつた。彼女は驚ろいてお秀を見た。其顏は先刻と同じやうに火熱つてゐた。けれども凉しい彼女の眼に宿る光りは、たゞの怒りばかりではなかつた。口惜しいとか無念だとかいふ敵意の外に、まだ認めなければならない或物が其所に陽炎つた。然しそれが何であるかは、彼女の口を通して聽くより外に途がなかつた。二人は惹き付けられた。今迄持續して來た心の態度に角度の轉換が必要になつた。彼等は遮ぎる事なしに、その輝やきの說明を、彼女の言葉から聽かうとした。彼等の豫期と同時に、其言葉はお秀の口を衝いて出た。

百九

「實は先刻から云はうか止さうかと思つて、考へてゐたんですけれども、そんな風に兄さんから冷笑かされて見ると、私だつて默つて歸るのが厭になります。だから云ふ丈の事は此所で云つて仕舞ひます。けれども一應お斷りして置きますが、是から申し上げる事は今迄のとは少し意味が違ひますよ。それを今迄通りの態度で聽いてゐられると、私だつて少し迷惑するかも知れません、といふのは、たゞ私が誤解されるのが厭だといふ意味でなくつて、私の心持があなた方に通じなくなるといふ譯合からです」

お秀の說明は斯ういふ言葉で始まつた。それが既に自分の態度を改めかゝつてゐる二人の豫期に一倍の角度を與へた。彼等は默つて其後を待つた。然しお秀は

もう一遍念を押した。

「少しや眞面目に聽いて下さるでせうね。私の方が眞面目になつたら」

斯う云つたお秀は其強い眼を津田の上からお延に移した。

「尤も今迄が不眞面目といふ譯でもありませんけれどもね。何しろ嫂さんさへ此所にゐて下されば、まあ大丈夫でせう。何時もの兄妹喧嘩になつたら、其時に止めて頂けばそれ迄ですから」

お延は微笑して見せた。然しお秀は應じなかつた。

「私は何時かつから兄さんに云はう〳〵と思つてゐたんです。嫂さんのゐらつしやる前でですよ。だけど、其機會がなかつたから、今日迄云はずにゐました。それを今改めてあなた方のお揃ひになつた所で申してしまふのです。それは外でもありません。よござんすか、あなた方お二人は御自分達の事より外に何にも考へてゐらつしやらない方だといふ事丈なんです。自分達さへ可ければ、いくら他が困らうが迷惑しようが、丸で餘所を向いて取り合はずにゐられる方だといふ丈なんです」

此斷案を津田は寧ろ冷靜に受ける事が出來た。彼はそれを自分の特色と認める上に、一般人間の特色とも認めて疑はなかつたのだから。然しお延には又是程意外な批評はなかつた。彼女はたゞ呆れるばかりであつた。幸か不幸かお秀は彼女の口を開く前にすぐ先へ行つた。

「兄さんは自分を可愛がる丈なんです。嫂さんは又兄さんに可愛がられる丈なんです。あなた方の眼には外に何にもないんです。妹などは無論の事、お父さんもお母さんももうないんです」

此所迄來たお秀は急に後を繼ぎ足した。二人の中の一人が自分を遮ぎりはしまいかと恐れでもするやうな

様子を見せて。

「私はたゞ私の眼に映つた通りの事實を云ふ丈です。それを何うして貰ひたいといふのではありません。もう其時機は過ぎました。有體にいふと、其時機は今日過ぎたのです。實はたつた今過ぎました。あなた方の氣の付かないうちに、過ぎました。私は何事も因緣づくと諦らめるより外に仕方がありません。然し其事實から割り出される結果丈は是非共あなた方に聽いて頂きたいのです」

お秀は又津田からお延の方に眼を移した。二人はお秀の所謂結果なるものに就いて、判然した觀念がなかつた。從つてそれを聽く好奇心があつた。だから默つてゐた。

「結果は簡單です」とお秀が云つた。「結果は一口で云へる程簡單です。然し多分あなた方には解らないでせう。あなた方は決して他の親切を受ける事の出來ない人だといふ意味に、多分御自分ぢや氣が付いてゐらつしやらないでせうから。斯う云つても、あなた方にはまだ通じないかも知れないから、もう一遍繰り返します。自分丈の事しか考へられないあなた方は、人間として他の親切に應ずる資格を失なつてゐらつしやるといふのが私の意味なのです。つまり他の好意に感謝する事の出來ない人間に切り下げられてゐるといふ事なのです。あなた方はそれで澤山だと思つてゐらつしやるかも知れません。何處にも不足はないと考へておいでなのかも分りません。然し私から見ると、それはあなた方自身に取つて飛んでもない不幸になるのです。人間らしく嬉しがる能力を天から奪はれたと同樣に見えるのです。兄さん、あなたは私の出した此お金は欲しいと仰やるのでせう。然し私の此お金を出す親切は不用だと仰やるのでせう。私から見ればそれが丸で逆です。人間として丸で逆なのです。だから大變な不幸

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com